

地域との連携を通じたキャリア教育の効果に関する検討

— 大学生が企画・立案した「子ども対象キャリア体験イベント」に関する考察 —

有川 かおり・長江 曜子

1 問題意識と研究目的

大学生を取り巻く環境は、時代と共に変化してきた。特に昨今の、産業・経済の構造的な変化、雇用の多様化・流動化は、学生たち自身の将来についてのとらえ方にも、変化をもたらしている。また、学生たちが、自身の将来を考える時に「モデルになる大人」「理想とする大人」に出会うチャンスを見つけにくく、夢や希望のあふれる将来を描くことが容易ではなくなってきたという現状がある。少し前の時代であれば当たり前が存在した、世代や立場の違いをこえた学び合いが、成立しにくい社会になってきたのである。

この状況を受け、2003年4月に「若者自立・挑戦戦略会議」（文部科学省・厚生労働省・経済産業省・内閣府の関係4省庁が参加）が発足し、教育・雇用・産業政策の連携による「若者自立・挑戦プラン」（キャリア計画総合計画）の基本的な方向が示された。2005年には、経済産業省が産業界と連携し、「社会人基礎力に関する研究会」が立ち上げられ、若者が社会に出るにあたり必要である基礎的な能力についての議論がなされた。そこで議論された「社会人基礎力」の具体的な能力は、1.「前に踏み出す力」（主体性、働きかけ力、実行力）、2.「考え抜く力」（課題発見力、計画力、創造力）、3.「チームで働く力」（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握能力、規律性、ストレスコントロール能力）の3能力・12能力要素である。以上の能力は、「基礎学力」や「専門知識」を活かすための力と位置付けられており、2007年からは、「社会基礎力育成・評価方法開発事業」のモデル校の指定を受けた各大学で、人材育成が試みられている（経済産業省2006、2008a、2008b、2009、2010、2011、文部科学省2011）。

そこで筆者らは、大学生が地域の多様な大人とのつながりの中で学びを深める、「地域連携を通じたキャリア教育の取り組み」に着目し、大学の研究所主催のキャリア教育講座に、企画から参画した学生の成長を評価することにより、筆者らの研究課題である「地域連携を通じた学生の成長と課題」についての手がかりを得たい。具体的には、2016年

度に聖徳大学生涯学習研究所で実施した、「ジュニア夢カレッジ2」に企画から参画した学生への調査をもとに、分析を行うものとする。

なお「ジュニア夢カレッジ2」とは、小学校4年生から中学校3年生を対象とし、大学生を中心とした産官学民のメンバーが連携し企画した、キャリア教育講座である。「プロから本気で、仕事の楽しさと厳しさを学ぶ」ということをコンセプトとし、15種の職業体験を提供し、実施した。参加者である小中学生のキャリア教育はもちろんのこと、大学生が企画から参画し、全ての職業体験の打ち合わせの主体者になることで、社会人基礎力の向上をはかることを、目的の一つに掲げた事業であった。

2 研究の方法と手順

第1に、「地域連携を通じたキャリア教育」の現状について、先行研究をもとに、その実態を明らかにする。

第2に、聖徳大学生涯学習研究所が実施した「ジュニア夢カレッジ2」に限定して、詳細な事例をとりあげる。ここではまず、「ジュニア夢カレッジ2」に企画から参画した学生と共に作成した、「講座企画において必要な能力の保有状況調査」を活用し、「ジュニア夢カレッジ2」に企画から参画することは、学生たちにとって、どのような学びがあるのかを評価する。調査は、講座の企画段階（7月）と講座の実施後（12月）の2回実施した。

この調査を通じ、地域連携を通じたキャリア教育講座の企画に参画した学生が、活動に参加する前と後で、どのような変化があったかを明らかにする。

以上を通じて、「地域連携を通じた学生の成長と課題」についての手がかりを得たい。

なお、本研究の仮説は以下の3つに設定した。

仮説1：昨年度実施した「ジュニア夢カレッジ」にも参画した学生（経験者）、今年度の「ジュニア夢カレッジ2」から参画した学生（未経験者）共に、事業の実施前と後では、できることが増える。

有川 かおり・長江 曜子

仮説 2：未経験者の方が経験者に比べて伸び率が高くなる。

仮説 3：しかし、大人と関わり、現実を突きつけられることによって、経験者、未経験者共にできなくなることも出てくる。

3 地域連携を通じたキャリア教育に関する先行研究

キャリア教育は、「フリーター」「ニート」といった状況にある若者層の雇用問題に対する政府全体の対策として、2003年に文部科学省、厚生労働省、経済産業省、内閣府が連携をはかり取りまとめられた、「若者自立・挑戦プラン」(キャリア計画総合計画)に基づき実施されている教育全般をさす。将来を担う若者たちに勤労観、職業観を育み、自立できる能力をつけることを目的として、全国各地で実施されている。

しかし、全国各地でキャリア教育は実施されており、様々な研究・実践が積み重ねられているが、地域との連携を通じた大学生のキャリア教育を扱った研究・実践事例は少ない。

国立情報学研究所の CiNii によれば、「大学生・キャリア教育」のキーワード検索をすると 219 件の研究が報告されており、「地域連携・キャリア教育」のキーワードで検索すると 35 件が報告されている(2016年6月16日現在)。地域との連携を通じたキャリア教育について、詳細にみていくと以下の通りであった。12件は義務教育段階を扱った研究、10件は高等学校や高等専門学校での実践をもとにした研究、国際的な事例をもとにした研究が1件である。筆者が本論文で主眼としている大学での実践をもとにした研究は12件であり、全体の34%とやや少ない。内容についてみていくと、受け入れ団体に視点を当てた研究が1件、その他は実施主体である大学に視点を当てたものであった。

受け入れ団体に視点を当てた研究では、地域との連携を通じたキャリア教育の課題として、「社会的価値、経済価値、教育価値の3つのバランスをどのようにとっていくのか」(小笠原ら 2014)ということを挙げている。これは、多様なセクターが協働し、事業を推進していくことの価値に対する重要な指摘である。

一方、実施主体である大学に視点を当てた研究、大学生のボランティアの育成を核とした、地域連携を通じたキャリア教育プログラムに関する研究では、「ボランティアはキャリアに対する学生の意識を高める」こと、「仕事や生き方に対する学生の意識を高める試み」(川崎, 中川 2011)であることを明らかにしている。以上、地域連携を通じたキャリア教育プログラムの価値が明らかになっている。しかし、当然のことながら課題もある。「事業の推進」と「学生への

教育」のバランスに関する課題である。このことについて森(2007)では、「クリエイティブな活動」と「教育カリキュラムの有効的連続」を図り、「活動全体に変革と継続性という両義的な性質を注入し続けていく」ことは、「困難かつ重要な課題」であると指摘している。

本研究で、地域連携を通じた大学生のキャリア教育について取り上げる理由は以下の2点である。

1点目は、地域連携を通じた大学生のキャリア教育の取り組みは、「大学生」と「関与する大人」との学び合いの中から新たな価値が創造されているという点である。これは、世代や立場の違いをこえた学びあいが成立している一例であり、ここでの課題を明らかにすることは、他のプログラムを立案する際にも活用できる。

2点目は、地域連携を通じた大学生のキャリア教育について、「学生の成長」(特に「社会人基礎力」の向上)に視点を当て、成長を数値化・評価しようとする試みは筆者が知る限り無い点である。したがって、本研究で講座の企画・立案から参画している学生に対し調査を行い、保有能力の伸びについての評価を試みる価値がある。

以上の理由により、本研究において地域連携を通じたキャリア教育を取り上げることにする。

4 「ジュニア夢カレッジ2」の概要

まず、「ジュニア夢カレッジ2」の概要についておさえた。 「ジュニア夢カレッジ2」とは、前述のとおり、小学校4年生から中学校3年生を対象とし、大学生を中心とした産官学民のメンバーが連携し企画した、キャリア教育講座であった。コンセプトは、「プロから本気で仕事の楽しさと厳しさを学ぶ」とし、主な目的を「教育：子どもと大学生に向けた2種類のキャリア教育」「連携：大学と行政、大学と企業、市内4大学の連携」と位置づけて実施した。なお、2015年度に1回目の「ジュニア夢カレッジ」を開催し、2016年度の今回「ジュニア夢カレッジ2」というタイトルで再び実施した。したがって、同様の講座の開催は2回目である。表2は、講座概要及び講座の企画に参画したメンバーの属性・人数である。主催は聖徳大学生涯学習研究所とし、聖徳大学6学部、聖徳大学短期大学部の2学科、聖徳大学の社会貢献活動の一つである学外向け生涯学習講座、聖徳大学オープン・アカデミーが共催・協力という形で関与した。学外組織では、NPOが4団体、企業が5社関与し、企画・立案をすすめていった。学生を含む合計参画人数は82名である。学内外の多くの組織・個人が関与することにより、多様な専門性を持った人々が講座の企画・立案に関与したことも、この講座の特徴の一つであった。(表1)

地域との連携を通じたキャリア教育の効果に関する検討

表1：講座概要及び講座の企画に参画したメンバーの属性・人数

講座名	ジュニア夢カレッジ2～プロから学ぶお仕事体験～
目的	1) 教育：子どもと大学生に向けた2種類のキャリア教育 ①子どもがプロから本物の仕事を学び、現実のものにしていくこと。 働くことの視野を広げ、仕事の選択肢を増やすこと。 ②学生が社会参画を通じて大人や仕事を身近なものとする事。 職業に必要な技術や能力についての知識を得る機会とすること。 2) 連携：大学と行政、大学と企業、市内4大学の連携 ①未来を担う子ども達に向けて、「夢」「仕事」「働くこと」を伝える機会を大人達が持つこと。 ②産学官民がそれぞれの得意分野や特徴を生かし、本事業に取り組むことで、相互の理解を深める機会とすること。 ③地域課題に即した事業のありかた、産学官民の役割分担と効果的な連携方策を検討すること。
コンセプト	プロから本気で仕事の楽しさと厳しさを学ぶ
参画人数 (セクター別)	学：58名(内、学生は39名)、産：7名、官：2名、民：15名 合計：82名

注：聖徳大学生涯学習研究所(2016a)を参考に有川作成

「ジュニア夢カレッジ2」の参加者属性・人数についてまとめたのが、表2である。

表2：「ジュニア夢カレッジ2」の参加者属性・人数

	小学生			中学生			計
	4年生	5年生	6年生	1年生	2年生	3年生	
男性	25	15	14	4	3	0	61
女性	72	22	28	9	2	1	133
計	97	37	42	13	5	1	195

注：聖徳大学生涯学習研究所(2016b)を参考に有川作成

対象は小学校4年生から中学校3年生であったが、学年が下がるにつれ、参加者数が多いという傾向があった。また、参加者の性別でみていくと、男子より女子の方が、約2倍の人数が参加していた。

組織・企画立案プロセスは、図1「ジュニア夢カレッジ2」組織・企画立案プロセスの通りである。

まず、聖徳大学内組織からみていきたい。聖徳大学内組織は、地域連携センターの傘下にある生涯学習研究所の所長を企画総括とし、生涯学習研究所事務局が学外との交渉や事務的な部分を、知財戦略課・地域連携課の支援を受けながら実施した。また、企画総括である生涯学習研究所長から、企画の進捗状況等を学長・副学長へ報告をすることによりアドバイスを受け、すぐに企画自体の方向性を改善できる体制を整えた。

続いて、聖徳大学内組織と地域サポーター組織についてである。この部分が実際に講座の企画をしていくコアの部分であった。「働く」を考える研究会」を中核とし、実働チーム(A, B, Cチーム)を組織、企画・立案をすすめていった。それぞれのチームに、事務局である生涯学習研究所スタッフ及び学生のリーダーを配置し、各チームのマネジメントを学生が中心となっていくことができる体制を整えた。なお進捗状況については、常に上部組織である「働く」を考える研究会」に報告しアドバイスを受け、必要に応じて企画の方向性を改善していった。

最後に、職業体験講師(プロの職業人)についてである。講座への協力要請に関しては、前述の通り生涯学習研究所

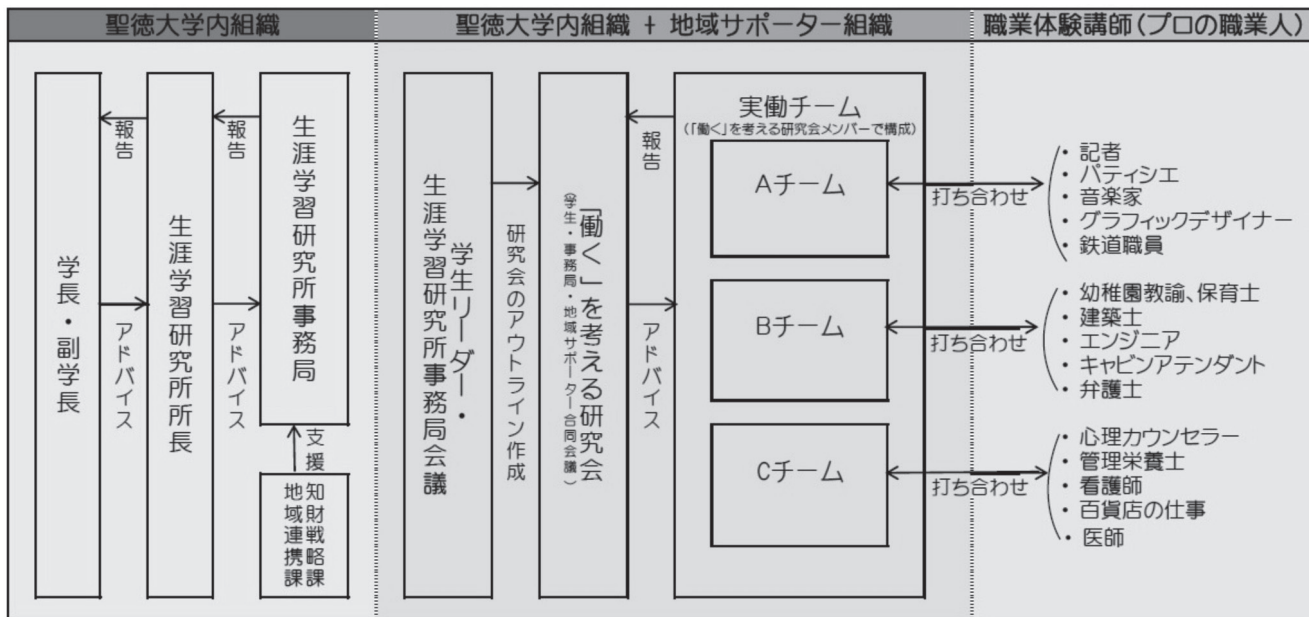


図1：「ジュニア夢カレッジ2」組織・企画立案プロセス

注：聖徳大学生涯学習研究所(2016a)より抜粋

有川 かおり・長江 曜子

事務局が行った。そして、協力の内諾を受けた上で、実働チームの学生が各々担当する講師との打ち合わせを重ね、実際に参加する子どもたちが体験するプログラムを作っていた。

「働く」を考える研究会」の各回の内容と位置づけは、表3の通りである。各回の実施内容については、生涯学習研究所事務局と学生リーダー、学生副リーダー4名が議論の上、決定していった。議論の結果、前半の3回を「働く」とは何か」「この講座を学生と他のセクターの人々が関与し企画・立案する価値は何か」という、企画の根底部分に焦点を当て実施することとした。また後半の7回は、実務的な部分に焦点を当て実施した。全体を通じ、企画・立案を学生主体で進めていった。

5 講座企画への参画を通じた学生の変化

一企画から参画した学生を対象とした調査から一これまで「ジュニア夢カレッジ2」の概要と課題についておさえてきた。ここからは、「講座企画において必要な能力の保有状況調査票」を活用した調査の結果を用いて、学生への教育効果の検討を行いたい。調査結果を基に、「地域連携を通じたキャリア教育」講座の企画に参画した学生に、どのような変化があったかを検討したのが、表4「各項目の平均およびSDと多重比較」である。小項目の5を最高ランクの保有能力水準とし、数値が下がるにつれ保有能力水準が低いことを示している。

表3：「働く」を考える研究会 各回の内容と位置づけ

回数	日時・場所	参加対象者	参加人数	実施内容
第1回	2016年5月25日(水) 聖徳大学10号館6階	学生(リーダー) 事務局	学生:5名,事務局:2名 卒業生:1名 合計8名	1. 昨年度の振り返り, 改善点等の提案 2. 今年度実施したい職業の選定 3. 企画立案にあたってのルール決定
第2回	2016年6月27日(月) 聖徳大学10号館5階	学生 事務局	学生:21名,事務局:2名 卒業生:1名 合計24名	1. 他己紹介 2. WS 「この講座は何のために実施するのか」 3. WS 「講座を成功させるために個人ベースで必要な能力とは?」
第3回	2016年7月11日(月) 聖徳大学10号館5階	学生 事務局	学生:22名,事務局:2名 卒業生:1名 合計25名	1. WS 「私の出会ったすごい人」 2. 「講座企画において必要な能力の保有状況調査」の記入 3. WS 「タイムスケジュール案を考えてみよう」 4. 企画メンバーの学生が担当したい職業の調査
第4回	2016年7月26日(火) 聖徳大学10号館6階	学生(リーダー) 事務局	学生:6名,事務局:2名 卒業生:1名 合計9名	1. 地域サポーターとの関わり方についての議論 2. Win-Win の関係構築に向けての運営体制についての議論 3. 内部の組織作りについての検討
第5回	2016年8月3日(水) 聖徳大学10号館6階	学生(リーダー) 事務局	学生:5名,事務局:2名 卒業生:1名 合計8名	1. 内部の運営体制の決定 2. 企画メンバーの学生の担当職業の仮決定 3. 企画メンバー同士の信頼関係構築のための仕組み作り
第6回	2016年9月29日(木) 聖徳大学10号館5階	学生 事務局	学生:28名,事務局:2名 卒業生:1名 合計31名	1. 「私個人が講座企画を通して身に付けたい能力」の発表 2. チーム名・目標の決定 3. 外部講師と関わる時のマナーについての講習会
第7回	2016年10月11日(火) 聖徳大学10号館5階	学生 事務局 地域サポーター	学生:26名,事務局:2名 卒業生:1名,地域サポーター:3名 合計32名	1. 職業別打ち合わせ状況の報告 2. 開講式・閉講式の運営方法についての議論
第8回	2016年10月19日(水) 聖徳大学10号館6階	学生(リーダー) 事務局	学生:6名,事務局:2名 卒業生:2名 合計10名	1. 懸念事項の洗い出し, 及び議論 2. 開講式・閉講式の運営方法について, たたき台の決定
第9回	2016年11月16日(水) 聖徳大学10号館5階	学生 事務局 地域サポーター	学生:25名,事務局:2名 卒業生:2名,地域サポーター:3名 合計32名	1. 申し込み状況の報告 2. 職業別打ち合わせ状況の報告 3. 開講式・閉講式の運営方法のたたき台をベースとした議論
第10回	2016年11月28日(月) 聖徳大学10号館6階	学生 事務局 地域サポーター	学生:32名,事務局:2名 卒業生:2名,地域サポーター:2名 合計38名	1. 職業別打ち合わせ状況の報告 2. 開講式・閉講式の運営方法のたたき台をベースとした議論 3. スタッフ資料の読み合わせ, 最終調整・最終確認

注1：聖徳大学生涯学習研究所(2016b)を参考に有川作成

注2：各回の実施内容は、生涯学習研究所事務局と学生リーダー、学生副リーダー4名が議論の上決定した。

表4：各項目の平均およびSDと多重比較

大項目	中項目	平均				SD				多重比較	
		経験者 事前	経験者 事後	未経験者 事前	未経験者 事後	経験者 事前	経験者 事後	未経験者 事前	未経験者 事後	経験者	未経験者
I 基礎的能力	I-1 笑顔で挨拶をすることが出来ますか？	4.4	4.2	3.8	3.9	0.8	0.9	0.9	0.9	事前＝事後	事前＜事後
	I-2 相手によって言葉遣いを変えるなど、不快に思われないう態度をとることができますか？	3.2	4.1	3.1	3.7	0.9	0.6	0.7	1	事前＝事後	事前＜事後
	I-3 人に対して感謝の気持ちを持つことができますか？	3.2	4.4	3.2	4	0.6	0.8	0.9	1.1	事前＜事後	事前＜事後
	I-4 人と協力しながら企画をすすめることができますか？	3.1	4.3	2.9	3.6	0.7	0.9	0.5	0.8	事前＜事後	事前＜事後
	I-5 相手の立場を理解し、必要に応じた配慮をすることができますか？	3.3	3.6	3.1	3.5	0.8	1.1	0.8	0.9	事前＜事後	事前＜事後
	I-6 積極的に物事に取り組み、必要に応じて配慮をすることができますか？	3.3	3.8	2.7	3.3	0.8	1.1	0.7	1	事前＝事後	事前＜事後
	I-7 失敗を恐れず挑戦することが出来ますか？	2.9	3.6	2.5	3	0.7	1.2	0.8	1.1	事前＝事後	事前＝事後
II 課題解決能力	II-1 期限を守って仕事をすることが出来ますか？	2.6	4	2.9	3.5	0.8	1.1	0.7	1.1	事前＜事後	事前＜事後
	II-2 責任を持って、物事に最後まで取り組むことができますか？	3.6	4.2	3.3	3.8	0.5	1.1	0.5	0.9	事前＜事後	事前＝事後
	II-3 進捗状況を適切なタイミングで報告することが出来ますか？	3.4	3.9	2.7	3.2	1	1.1	0.6	1	事前＜事後	事前＝事後
	II-4 必要に応じて連絡をとることが出来ますか？	3.1	4	3	3.4	0.6	1.2	0.4	0.9	事前＜事後	事前＝事後
	II-5 困りごとがあった時、人に相談をすることが出来ますか？	3.4	3.9	3	3.2	1.1	1.3	0.8	1	事前＜事後	事前＝事後
	II-6 自己判断をせず、必要に応じて確認をとることが出来ますか？	3.5	4.3	3	3.6	1.3	0.9	0.8	1	事前＜事後	事前＝事後
III 自己発信能力	III-1 企画を進めていく上で悩みが発生した時、誰かに頼ることが出来ますか？	3.3	3.9	2.9	3.5	0.9	1.3	0.9	0.9	事前＜事後	事前＝事後
	III-2 周りの状況を観察し、多様な選択肢からベストな判断をすることが出来ますか？	3.3	3.6	2.8	3.2	0.9	1.2	0.7	0.8	事前＜事後	事前＝事後
	III-3 人の助言を聞いたうえで、自分に足りないものを理解することが出来ますか？	3.7	3.9	3.1	3.5	0.8	1	1	1	事前＝事後	事前＝事後
	III-4 自分の意見を分かりやすく相手に説明することは出来ますか？	3.5	3.1	2.9	2.8	0.7	0.9	0.8	0.8	事前＝事後	事前＞事後
IV 危機管理能力	IV-1 自分の立ち位置・役割を理解し、全体の様子を客観視することが出来ますか？	3.4	3.8	2.8	3.2	1.3	1.2	0.9	1	事前＜事後	事前＝事後
	IV-2 トラブルに発展しそうな事象を察知することが出来ますか？	3	3.4	2.9	3.2	0.7	1.1	0.9	1.1	事前＝事後	事前＝事後
	IV-3 失敗した時、それを素直に認め克服しようとする態度がとれますか？	3.5	4	2.9	3.4	1	1.2	0.9	1	事前＜事後	事前＜事後
	IV-4 ストレスの発生源を理解することが出来ますか？	3.7	3.9	3	3.4	0.8	1	1	1.3	事前＜事後	事前＜事後
	IV-5 仲間と話をすると、目上の人と話をする時の切り替えが出来ますか？	3.4	4.2	3.1	3.9	0.8	0.8	0.7	0.9	事前＜事後	事前＜事後

注1：「ジェニア夢カレッジ2」の企画・立案に参画した学生と共に作成した、「講座企画において必要な能力の保有能力調査票」を活用して行った調査結果を参考に有川作成

注2：事前調査は2016年7月11日（月）、事後調査は2016年12月12日（月）にそれぞれ実施した。

有川 かおり・長江 曜子

基礎的能力では、経験者事前の平均の幅が2.9から4.4であった。中項目のⅠ-1「笑顔で挨拶をすることができますか？」が4.4で、Ⅰ-7「失敗を恐れず挑戦することができますか？」が2.9である。経験者事後は平均の幅が3.6から4.4となった。中項目のⅠ-3「人に対して感謝の気持ちを持つことができますか？」が4.4、Ⅰ-5「相手の立場を理解し、必要に応じた配慮をすることができますか？」と、Ⅰ-7「失敗を恐れず挑戦することができますか？」が3.6であった。続いて、未経験者についてみていきたい。未経験者事前の平均の幅は2.5から3.8であった。中項目のⅠ-1「笑顔で挨拶をすることができますか？」が3.8で、Ⅰ-7「失敗を恐れず挑戦することができますか？」が2.5である。未経験者事後は平均の幅が、3から4となった。中項目のⅠ-3「人に対して感謝の気持ちを持つことができますか？」が4、Ⅰ-7「失敗を恐れず挑戦することができますか？」が3であった。多重比較をみてみると、経験者はⅠ-3「人に対して感謝の気持ちを持つことができますか？」、Ⅰ-4「人と協力しながら企画をすすめることができますか？」、Ⅰ-5「相手の立場を理解し、必要に応じた配慮をすることができますか？」が事前より事後の方が伸びていた。一方未経験者では、Ⅰ-1「笑顔で挨拶をすることができますか？」、Ⅰ-2「相手によって言葉遣いを変えるなど、不快に思われない態度をとることができますか？」、Ⅰ-3「人に対して感謝の気持ちを持つことができますか？」、Ⅰ-4「人と協力しながら企画をすすめることができますか？」、Ⅰ-5「相手の立場を理解し、必要に応じた配慮をすることができますか？」、Ⅰ-6「積極的に物事に取り組むことができますか？」が伸びている。

課題解決能力では、経験者事前の平均の幅が2.6から3.6であった。中項目のⅡ-2「責任を持って、物事に最後まで取り組むことができますか？」が3.6で、Ⅱ-1「期限を守って仕事をすることができますか？」が2.6である。経験者事後は平均の幅が、3.9から4.3となった。中項目のⅡ-6「自己判断をせず、必要に応じて確認をとることができますか？」が4.3、Ⅱ-3「進捗状況を適切なタイミングで報告することができますか？」と、Ⅱ-5「困りごとがあった時、人に相談をすることができますか？」が3.9であった。続いて未経験者についてみていきたい。未経験者事前の平均の幅は、2.7から3.3であった。中項目のⅡ-2「責任を持って、物事に最後まで取り組むことができますか？」が3.3で、Ⅱ-3「進捗状況を適切なタイミングで報告することができますか？」が2.7である。未経験者事後は平均の幅が、3.2から3.8となった。中項目のⅡ-2「責任を持って、物事に最後まで取り組むことができますか？」が3.8、

Ⅱ-3「進捗状況を適切なタイミングで報告することができますか？」と、Ⅱ-5「困りごとがあった時、人に相談をすることができますか？」が3.2であった。多重比較をみてみると、経験者は課題解決能力の全項目である、Ⅱ-1「期限を守って仕事をすることができますか？」、Ⅱ-2「責任を持って、物事に最後まで取り組むことができますか？」、Ⅱ-3「進捗状況を適切なタイミングで報告することができますか？」、Ⅱ-4「必要に応じて連絡をとることができますか？」、Ⅱ-5「困りごとがあった時、人に相談をすることができますか？」、Ⅱ-6「自己判断をせず、必要に応じて確認をとることができますか？」が事前より事後の方が伸びていた。一方未経験者では、Ⅱ-1「期限を守って仕事をすることができますか？」が伸びている。

自己発信能力では、経験者事前の平均の幅が3.3から3.7であった。中項目のⅢ-3「人の助言を聞いたうえで、自分に足りないものを理解することができますか？」が3.7で、Ⅲ-1「企画を進めていく上で、悩みが発生した時、誰かに頼ることができますか？」とⅢ-2「周りの状況を観察し、多様な選択肢からベストな判断をすることができますか？」が3.3である。経験者事後は、平均の幅が3.1から3.9となった。中項目のⅢ-1「企画を進めていく上で、悩みが発生した時、誰かに頼ることができますか？」とⅢ-3「人の助言を聞いたうえで、自分に足りないものを理解することができますか？」が3.9で、Ⅲ-4「自分の意見を分かりやすく相手に説明することはできますか？」が3.1であった。続いて未経験者についてみていきたい。未経験者事前の平均の幅は、2.8から3.1であった。中項目のⅢ-3「人の助言を聞いたうえで、自分に足りないものを理解することができますか？」が3.1で、Ⅲ-2「周りの状況を観察し、多様な選択肢からベストな判断をすることができますか？」が2.8である。未経験者事後は平均の幅が、2.8から3.5となった。中項目のⅢ-1「企画を進めていく上で悩みが発生した時、誰かに頼ることができますか？」とⅢ-3「人の助言を聞いたうえで、自分に足りないものを理解することができますか？」が3.5で、Ⅲ-4「自分の意見を、分かりやすく相手に説明することはできますか？」が2.8であった。多重比較をみてみると、経験者はⅢ-1「企画を進めていく上で、悩みが発生した時、誰かに頼ることができますか？」とⅢ-2「周りの状況を観察し、多様な選択肢からベストな判断をすることができますか？」が事前より事後の方が伸びていた。一方未経験者では、Ⅲ-4「自分の意見を、分かりやすく相手に説明することはできますか？」が、事前より事後の数値の方が落ちている。

危機管理能力では、経験者事前の平均の幅が3から3.7

地域との連携を通じたキャリア教育の効果に関する検討

であった。中項目のⅣ-4「ストレスの発生源を理解することができますか?」が3.7で、Ⅳ-2「トラブルに発展しそうな事象を察知することができますか?」が3である。経験者事後は平均の幅が、3.4から4.2となった。中項目のⅣ-5「仲間と話をすると、目上の人と話をすると、切り替えができますか?」が4.2、Ⅳ-2「トラブルに発展しそうな事象を察知することができますか?」が3.4であった。続いて未経験者についてみていきたい。未経験者事前の平均の幅は2.8から3.1であった。中項目のⅣ-5「仲間と話をすると、目上の人と話をすると、切り替えができますか?」が3.1で、Ⅳ-1「自分の立ち位置・役割を理解し、全体の様子を客観視することができますか?」が2.8である。未経験者事後は平均の幅が、3.2から3.9となった。中項目のⅣ-5「仲間と話をすると、目上の人と話をすると、切り替えができますか?」が3.9、Ⅳ-1「自分の立ち位置・役割を理解し、全体の様子を客観視することが

できますか?」とⅣ-2「トラブルに発展しそうな事象を察知することができますか?」が3.2であった。多重比較をみると、経験者はⅣ-1「自分の立ち位置・役割を理解し、全体の様子を客観視することができますか?」、Ⅳ-3「失敗した時、それを素直に認め克服しようとする態度がとれますか?」、Ⅳ-4「ストレスの発生源を理解することができますか?」、Ⅳ-5「仲間と話をすると、目上の人と話をすると、切り替えができますか?」が事前より事後の方が伸びていた。一方未経験者では、Ⅳ-3「失敗した時、それを素直に認め克服しようとする態度がとれますか?」、Ⅳ-4「ストレスの発生源を理解することができますか?」、Ⅳ-5「仲間と話をすると、目上の人と話をすると、切り替えができますか?」が伸びている。

続いて、回答の偏りについてみていきたい。回答の偏りについて示したのが、表5「五件法の人数別偏り」である。

有川 かおり・長江 曜子

表5：五件法の人数別偏り

大項目	中項目	①できない		②時々できる		③できる		④しばしばできる		⑤いつもできる			
		経験者前	未経験者前	経験者後	未経験者後	経験者前	未経験者前	経験者後	未経験者後	経験者前	未経験者前	経験者後	未経験者後
I 基礎的能力	I-1	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(3%)	2(20%)	3(30%)	7(24%)	2(20%)	6(60%)	5(50%)	8(28%)	10(34%)
	I-2	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	4(40%)	1(10%)	18(62%)	8(28%)	6(60%)	7(70%)	5(17%)	10(34%)
	I-3	0(0%)	0(0%)	1(1%)	0(0%)	3(10%)	2(7%)	15(52%)	10(34%)	6(60%)	3(30%)	8(28%)	14(48%)
	I-4	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	5(17%)	3(30%)	22(76%)	10(34%)	5(50%)	3(30%)	2(7%)	12(41%)
	I-5	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	5(17%)	2(20%)	13(45%)	8(28%)	5(50%)	4(40%)	8(28%)	12(41%)
	I-6	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	12(41%)	6(21%)	14(48%)	3(10%)	5(50%)	4(40%)	8(28%)	11(38%)
	I-7	0(0%)	0(0%)	1(3%)	2(20%)	9(31%)	5(50%)	17(59%)	3(30%)	3(30%)	2(20%)	6(21%)	10(34%)
II 課題解決能力	II-1	1(10%)	0(0%)	1(3%)	5(17%)	5(17%)	1(10%)	19(66%)	7(24%)	5(50%)	1(10%)	4(14%)	10(34%)
	II-2	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(3%)	2(20%)	19(66%)	1(10%)	5(50%)	2(20%)	8(28%)	12(41%)
	II-3	0(0%)	0(0%)	1(3%)	10(34%)	4(14%)	3(30%)	18(62%)	2(20%)	4(40%)	2(20%)	0(0%)	8(28%)
	II-4	0(0%)	0(0%)	0(0%)	3(10%)	4(14%)	7(70%)	24(83%)	13(45%)	7(70%)	3(30%)	8(28%)	13(45%)
	II-5	0(0%)	0(0%)	1(3%)	7(24%)	5(17%)	1(10%)	16(55%)	13(45%)	5(50%)	2(20%)	6(21%)	11(38%)
	II-6	1(10%)	0(0%)	0(0%)	8(28%)	4(14%)	2(20%)	15(52%)	10(34%)	4(40%)	1(10%)	4(14%)	8(28%)
III 自己発信能力	III-1	0(0%)	0(0%)	0(0%)	9(31%)	3(10%)	4(40%)	11(38%)	13(45%)	2(20%)	1(10%)	8(28%)	13(45%)
	III-2	0(0%)	0(0%)	1(3%)	8(28%)	6(21%)	4(40%)	15(52%)	12(41%)	3(30%)	2(20%)	10(34%)	11(38%)
	III-3	0(0%)	0(0%)	1(3%)	6(21%)	3(10%)	2(20%)	12(41%)	11(38%)	6(60%)	4(40%)	9(31%)	11(38%)
	III-4	0(0%)	0(0%)	0(0%)	9(31%)	4(14%)	6(60%)	14(48%)	11(38%)	6(60%)	3(30%)	6(21%)	11(38%)
IV 危機管理能力	IV-1	0(0%)	1(3%)	1(3%)	9(31%)	7(24%)	5(50%)	12(41%)	9(31%)	4(40%)	2(20%)	8(28%)	12(41%)
	IV-2	0(0%)	1(10%)	5(17%)	2(20%)	3(30%)	1(10%)	5(50%)	0(0%)	5(50%)	2(20%)	2(20%)	10(34%)
	IV-3	0(0%)	0(0%)	1(3%)	7(24%)	6(21%)	5(50%)	15(52%)	8(28%)	5(50%)	2(20%)	5(17%)	8(28%)
	IV-4	0(0%)	0(0%)	5(17%)	3(30%)	2(20%)	4(40%)	11(38%)	3(30%)	4(40%)	3(30%)	7(24%)	15(52%)
	IV-5	0(0%)	0(0%)	0(0%)	5(17%)	2(20%)	5(50%)	14(48%)	8(28%)	4(40%)	3(30%)	8(28%)	12(41%)

注1：「ジュニア夢カレッジ2」の企画・立案に参画した学生と共に作成した、「講座企画において必要な能力の保有能力調査票」を活用して行った調査結果を参考に有川作成。
注2：事前調査は2016年7月11日(月)、事後調査は2016年12月12日(月)にそれぞれ実施した。

地域との連携を通じたキャリア教育の効果に関する検討

表5から、以下の4点を読み取ることができた。

1点目は、経験者、未経験者共に事前調査では、回答が「③できる」に偏っていることである。しかし、未経験者の事後調査では、「④しばしばできる」「⑤いつもできる」に移動していた。また、経験者事前では、「③できる」と「④しばしばできる」に偏っていたが、経験者事後では「⑤いつもできる」に移動していた。

2点目は、未経験者のⅠ-7「失敗を恐れず挑戦することができますか？」では、事前調査では「②時々できる」に偏っていたが、事後調査では「③できる」に移動していることである。

3点目は、未経験者のⅢ-4「自分の意見を分かりやすく相手に説明することはできますか？」では、事前調査では偏りがみられなかったが、事後調査では「③できる」から、「②時々できる」に移動していることである。

4点目は、未経験者のⅣ-4「ストレスの発生源を理解することができますか？」では、事前調査では「⑤いつもできる」に偏りがなかったが、事後調査では「⑤いつもできる」に偏りがみられることである。

6 まとめ

本論文は、大学生が地域の多様な大人とのつながりの中で学びを深める、「地域連携を通じたキャリア教育の取り組み」に着目し、大学の研究所主催のキャリア教育講座に、企画から参画した学生の成長を評価することにより、「地域連携を通じた学生の成長と課題」について検討することを目的としていた。

今回は、聖徳大学生涯学習研究所が実施した「ジュニア夢カレッジ2」に限定し、詳細な調査を実施した。その結果、経験者、未経験者共に、講座の実施前と実施後では、できることが増えていることが分かった。これは、多様な大人と関わりを持ちながら、対等な関係で議論を重ね、講座の企画・立案を進めていった結果である。本論文の成果で特筆すべき点は以下の2点である。

1点目は、中項目Ⅰ-7「失敗を恐れず挑戦することができますか？」という項目と、Ⅳ-4「ストレスの発生源を理解することができますか？」という項目が、未経験者の群で特に伸びていたことである。これは言い変えると「チャレンジする力」「困難を理解する力」が伸びたということができる。これらの力は、「社会人基礎力」3能力12能力要素のうち、「前に踏み出す力」の中の「主体性」、「チームで働く力」の中の「ストレスコントロール能力」に内包されている能力である。したがって、「学生達が社会に出て必要になってくる能力が伸びた」といえるのではないだろ

うか。

2点目は、中項目Ⅲ-4「自分の意見を分かりやすく相手に説明することはできますか？」に問いに対し、未経験者は事前調査では「③できる」が多かったが、事後調査では「②時々できる」が増えた点である。これは一見すると能力が落ちたので、マイナスの結果であると評価できるかもしれない。しかし筆者らは、学生たちが多様な大人と関わりを持つ中で、「現実を突きつけられた」「自分が苦手であることを理解した」のではないかと考える。そして、相手の立場に配慮して発言することの大切さを理解したため、数値が下がったのではないだろうか。自己認識が深化し、自分自身が「できること」「苦手なこと」を正しく理解するということが、学生の成長にとって大変大切なことである。したがって、この項目の数値が落ちたことも、非常に価値のあることであると筆者らは考える。

本研究の仮説は以下の3点であった。仮説1：昨年度実施した「ジュニア夢カレッジ」にも参画した学生（経験者）、今年度の「ジュニア夢カレッジ2」から参画した学生（未経験者）共に、事業の実施前と後ではできることが増える。仮説2：未経験者の方が、経験者に比べて伸び率が高くなる。仮説3：しかし、大人と関わり現実を突きつけられることによって、経験者、未経験者共にできなくなることも出てくる。以上の仮説3点はいずれも実証されたことになる。

本研究では、地域連携を通じた学生の成長（とりわけ「社会人基礎力」の向上）を可視化するために、学生と共に「講座企画において必要な能力の保有能力調査票」を作成し、調査を実施した。その結果、「ジュニア夢カレッジ2」の企画・立案に参画した学生は、保有能力が向上していることが明らかになった。

一方で、研究課題として、以下の3点が挙げられる。1点目は、学生を対象とした評価が自己評価ベースのみになってしまった点である。今後、他者評価も含めた調査を実施し、さらに詳細な分析をしていきたい。2点目は、参画した学生たちの生の声を研究に反映させることである。本研究では、学生たちの成長の数値化を試み、一定の成果が出た。他方、学生たちの生の声を抽出し、分析するまでには至らなかった。したがって今後、参画した学生たちの生の声を抽出し本研究の成果と合わせてさらに詳細に論じていきたい。3点目は、企画・立案に参画した地域サポーターや職業体験講師（プロの職業人）を対象とした調査及び参加した子どもやその保護者を対象とした調査の分析にまで至らなかった点である。これらについて、既に調査は実施している。したがって、次稿以降に詳細な分析を行い

有川 かおり・長江 曜子

たい。以上3点を通し、「地域との連携を通じたキャリア教育の効果」について、さらに研究を発展させていきたい。

本稿は、筆者らが聖徳大学の学生や、地域のNPO、企業、行政関係者の皆様と共に創り上げた「ジュニア夢カレッジ2～プロから学ぶお仕事体験～」を事例として取り上げ、学生の成長を可視化し、評価するために行った研究の一部をまとめたものです。

学生リーダーの池田美咲さん、学生副リーダーの渡辺あてなさん、佐々木真歩さん、渡辺梨紗子さんの4名を中心とした企画から参画した学生39名は、授業の位置づけられていないボランティアな活動だったにもかかわらず、「参加する子どものため」「自分や後輩たちのため」に、本当によく頑張ってくれました。聖徳大学卒業生の谷由美子さん(聖徳大学生涯学習研究所事務局)、秋戸巴美さん、日高夏希さんもOGとして学生たちに多くのアドバイスをしてくれました。

また講座の企画に際し、地域のNPO、企業、行政関係者等、たくさんの方が力を貸して下さいました。当然ですが、大学だけでも学生だけでもこの講座を実施することは不可能でした。力を貸して下さいました全ての方に、あらためて感謝を申し上げます。

7 参考文献

- ・ 経済産業省(2006)「社会人基礎力に関する研究会-「中間まとめ」-」<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf> (2016年6月24日アクセス)
- ・ 森正美(2007)「地域で学ぶ,地域でつなぐ一宇治市における文化人類学的活動と教育の実践」文化人類学 72 / 2, pp.201-220
- ・ 経済産業省(2008a)「今から始める社会人基礎力育成と評価」<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/h19referencebook/h19referencebook.pdf> (2016年6月24日アクセス)
- ・ 経済産業省(2008b)「社会人基礎力に関する緊急調査」<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/2008chosa.pdf> (2016年6月24日アクセス)
- ・ 経済産業省(2009)「社会人基礎力実施モデル校について」<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/2009chosa.pdf> (2016年6月24日アクセス)
- ・ 経済産業省(2010)「大学生の『社会人観』の把握と『社会人基礎力』の認知度向上実証に関する調査」<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/201006daigakuseinosyakaijinkannohaakutonintido.pdf> (2016年6月24日アクセス)
- ・ 経済産業省(2011)「体系的な『社会人基礎力』育成・評価モデルに関する調査・研究」(調査委託・学校法人河合塾)<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/2011chosa.pdf> (2016年6月24日アクセス)
- ・ 文部科学省(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf (2016年6月24日アクセス), pp.30-32
- ・ 川崎智恵,中川元庸(2011)「ボランティア育成を核とした地域連携型キャリア教育プログラムの開発」マツダ財団研究報告書 vol.23, pp.11-20
- ・ 小笠原真結美,古川雅子,森田和行,大津昌,森田裕介(2014)「地域連携プロジェクト型学習における受入団体の効果に関する一考察」日本教育工学会研究報告集, pp.113-120
- ・ 聖徳大学生涯学習研究所(2016a)「ジュニア夢カレッジ2企画書」
- ・ 聖徳大学生涯学習研究所(2016b)「“働く”を考える研究会記録集」